

さようなら
こゝろに
は

GOOD BYE
DRAGON LIFE

竜生
人生22

永島ひろあき
HIROAKI NAGASHIMA

目次

第一章	人童会談	7
第二章	ガロアから嵐がやって来る	51
第三章	聞いていない	127
第四章	悲壮なるヴァジエ	165
第五章	宣戦布告	202
第六章	運命の車輪が回る	251



クシュリ

飛蝗の因子を
持つ虫人の少年。
肉弾戦に特化した
魔法戦士。

マノス

ガロア魔法学院随一の
ゴーレムクリエイター。
研究への情熱が
行きすぎている
部分がある。

アズナル

青虎人の少年。
レニアの事が
気になっている。

レニア

神造魔獣の魂を
持つ少女。
ドランを魂の父
と慕う。

MAIN CHARACTERS 主な登場人物



ネルネシア

“氷花”の異名を取る少女。
ガロア四強の一人に
数えられる。

クリスティーナ

“竜殺しの因子”を受け継ぐ
絶世の美人剣士。
ベルン男爵に
叙された。

ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の
転生した姿。
クリスティーナの下で
故郷ベルン村の発展に
取り組む。

第一章——人竜会談

私——古神竜ドラゴンことドラン・ベルレストを含む始原しげんの七竜しちりゅうにとって最大の恥にして、最悪の汚点とも言うべき存在、終焉竜を完全に消滅させてからしばしの事。

終焉竜に操られたディファラクシー聖法王国せいほうおうこくの侵略行為によってアーケレスト王国と周辺諸国にもたらされた混乱は、ようやく収まりつつあった。

彼らが用いた洗脳による支配は解除されたものの、民衆が正氣に戻った反動によって新たな混乱が引き起こされるなどの二次被害が発生した国もある。そんな中、我が母国アーケレストは安定を見せており、一国民としては誇らしい限りである。

全ての竜種の祖である始祖竜しそりゅうと同等の力を持つ終焉竜との戦いには、竜種のみならず、あらゆる神々も参加した。その為、この決戦に全精力を傾注けいちゅうした神々が地上の人々の祈りに応えられなくなるといふ非常事態が発生していたのだが、既にそれも乗り越えている。

ベルン男爵領の領主補佐官である私としては、領内の混乱はないと断言出来る。

今後の発展の為に優秀な人材をかき集めたのと、私が不在だった期間が短かったお蔭で、すぐに解決可能な程度の小さな問題くらいしか起きなかったのは、まことに幸いだった。

神々の奇跡が失われたかもしれないというところでもない事態に直面し、どの勢力にもベルンにちよつかいを出す余裕がなかったのは想像に難くない。

実のところ、世界に害をもたらす邪神の類も終焉竜対策で必死だったので、この「不在期間」に神関係の脅威はなかった。

しかし、そうとは知らぬ国家や、善なる神々の側の教団関係者はさぞや肝を冷やしていたに違いない。

神々は力を使い果たして寝込んでいるだけだから、回復すれば元通りになる。今は戦場に行かずに残った下級神や天使達が必死に頑張っているので、神聖魔法とも呼ばれる「神の奇跡」は、おおむね平時の水準に戻りつつある。

この異常事態を解決する糸口すら見つけられずにいた者達は、ほっと安堵の息を吐いて復調した神々に感謝の祈りを捧げているだろう。

真摯な祈りは神々にとってはちよつとした糧になるので、たとえ奇跡が起きなくても祈るという行為そのものは無駄ではない。

もつとも、復調した神々からの見返りを期待する下心が混じって、祈りが不純なものになるのはよろしくないのです、この事実を公にするつもりはないが。

さて、終焉竜との決戦後に体調を崩したのは神々ばかりでない。

あやつに止めを刺した私達始原の七竜は、始祖竜への再融合——さらにその上の超新竜形態に至り、勝利の代償として経験のない疲労に追い込まれている。

融合した私達が無事に分離出来たのは幸いだったが、まさかベッドの上から身を起こすのも難儀するほどの状態になるとは思わなかった。

とはいえ、肉体的な疲労に関しては、ひたすら安静に務めたお蔭で、今は出歩くくらいは問題ない程度に回復している。

「ふむ、自分の足で歩いて回れるというのはいいものだ」

我ながら本当にしみじみと呟いたのは、ベッドの上の住人を卒業し、鈍った体を回復させる為に屋敷の中庭を一周した後での事だった。

既に春は過ぎ去り、何もしていかなくてもじわりと汗が粒になる季節。

青い空から降り注ぐ陽光はいとも簡単に肌を黒く焼いてしまう。

私は時折吹く風の涼しさに目を細める。

息こそ上がっていないものの、動き回るにはどうにもまだ不安が残る体調だ。

魔力の生成量も、肉体の方は変わっていないのだが、魂^{たましい}の方は不安定化していて、狙った量の魔力を作り出せずにいる。

「これはまずいな」

蠟燭^{ろうそく}に火を灯^{とも}そうとしたら、火山を爆発させてしまう、などという失態を高い確率で犯してしまいかねない状態になっている。

このまま安静にしていれば、元の調子に戻ると思いたい……

「悩ましいものだな、ドランよ」

私同様にベッドの上の住人となっていた始原の七竜のうちの一柱——バハムートが顔を見せ、中庭にある長椅子に腰掛けた。

今の彼は本来の古神竜ではなく、知的な——何故か不必要な眼鏡^{めがね}を掛けた——竜人の姿を取っている。もちろん、彼だけでなくリヴァイアサンやアレキサンダーら、他の兄弟姉妹も同様だ。

私は彼の方へと歩み寄り、互いの状態を確認しようと言葉を交わす。

「バハムート。もう歩き回っていいのか？」

「我を含めて皆が歩ける程度には回復した。力の出力と調整が不安定な状態に陥^{おちい}っているのも、汝^{なげ}と同様だ。汝の場合は火の粉を払うつもりが星を吹き飛ばした、などとならぬように気を遣わなければならぬな」

「終焉竜と聖法王国の件は片付いたが、周辺の状況が穏やかではなくてね。私自身が戦場に立つ機会はどう思うかとは思いますが、厄介な問題が残ってしまったよ」

「終焉竜のような災害の再来はまずないとしても、汝の場合はこの地上世界で……そうさな、三竜帝^{さんりゅうてい}三龍皇^{さんりゅうおう}と同程度の力は保持しておきたいところだな」

「うーむ、竜界の同胞達ならば私よりも回復が早いだろうから、後で私が力を出しすぎないように、枷^{かせ}でも嵌^はめてもらうか」

「喜々として悪戯^{いたづら}を仕込む者が多いだろうな」

バハムートの指摘に、思わず苦笑が漏れる。

「竜界の同胞は、地上の同胞と違って私達に遠慮しないからなあ。その分、気が楽なのはよいのだが」

「万が一に備えて、三竜帝三龍皇に話を通しておいた方がよからう。この星で最も強大なのは彼らであり、また個としてだけでなく勢力としても最強なのだからな」

「ふむ、余計な苦労を彼らに掛けるのは心苦しいが、必要とあれば頭を下げる他ないな」

「頭を下げたら下げたで、あちらが恐縮して余計な手間が掛かるのが目に浮かぶようだ。時にドランよ、我々も介助の手を必要としない程度には回復した。しばし汝のこの第二の故郷を見て回りたいと思う」

「ほう、いいのではないかな。私にとつても、君ら兄弟姉妹にこのベルンの大地を自慢するまたとない機会だ。必要な費用などは私の財布から出すので、好きに見て回ってもらって構わんよ。もちろん、この地の法に従ってもらうのが大前提だ」

「それは承知の上だ。我を含めて他の同胞、特にアレキサンダーもそこは弁えておろうよ。ところでドラン、我から二つ、頼みたい事がある」

「なんだね？」

「一つはアレキサンダーを特に慰労してやつてほしい。終焉竜との戦いで汝の次に奮起していたからな。もう一つは汝とその恋人達との結婚式の日取りが決まったなら、知らせしてほしい。我ら兄弟姉妹、皆が心から寿ぎたいと願っている」

兄からのこれ以上なく嬉しい言葉に、私は自然と笑みが浮かび上がるのを感じた。

「頼まれるまでもなく、喜んで引き受けよう。私は幸せ者だ。竜と人と、双方の家族から祝福されるのだから」

「そうだな。汝はとても幸せ者だとも」

バハムートやアレキサンダーら我が同胞達が、竜界からの迎えに連れられてベルンを後にしたのは、それからしばらくしてからのである。

十

ベルン男爵クリスティーナの下で、庭師として仕えているベネスという男がいる。

五十代後半の短く太い体躯と白髪交じりの赤い髪をしたこの男は、実のところ、クリスティーナの父であるアルマディア侯爵から派遣された影の護衛とでも言うべき存在だった。

ベネス以外にも、クリスティーナと彼女の治める男爵領に害をなさんとする者達の動きを阻むよう命じられた護衛達はいる。

新しくやつてきた移住者の一家や、商人、傭兵などに扮して、それなりの数が男爵領で活動中だ。途方もない親馬鹿の発露と言えよう。

同時に、こうした影の護衛よりも多く、他の領主の手の者や異国の間者、世界の闇で蠢く秘密結社の手の者達が男爵領に入り込んでるのが現状だ。

統治者であるドラン達は、その常識外れの能力によって、非合法な活動を行なっている者達全てを当然の如く把握し、監視している。その上で、表向き普通に働いている分には監視に留めて、領内の経済活動の一助として役立ってもらう方針をとっていた。

たかが辺境の地、しかも若年の新興貴族相手に過剰な人員を割いている——と、各勢力を非難するには、この地を治める者達の能力と治めるに到った経緯が特異すぎた。

領主クリスティーナと補佐官ドランの戦闘能力が、大国の最強格の魔法使いや魔法戦士に匹敵するという情報は、既に近隣諸国に知れ渡っている。

実際の能力はその程度では済まないとは知っている者がいないとはいえ、まさしく一騎当千、大規模な軍団に相当する規格外の怪物達だ。

しかも彼らは、長らく人類国家と交流がなかった水龍皇龍吉の治める龍宮国や、エンテの森のユグドラシルに率いられた諸種族の重鎮達からの信頼も厚い。

これらの勢力とアークレスト王国が関係を結ぶきっかけを作ったのもまた、ドラン達だった。となれば、否が応でも注目せざるを得ないというものだ。

目を背け、耳を塞いでも、僅かに瞼の隙間から入り込んでくる光のように、あるいは耳にするりするりと忍び入る音のように、膨大な情報が半強制的に流れ込んでくる。

無自覚なのか意図的なのか、ベルン男爵領はそうした「馬鹿げた情報」を次から次へと発してくるのだ。

各勢力の裏仕事を担う者達の間では、今のところ水面下での暗闘は生じていない。少人数での小競り合い程度が関の山といったところ。

刻々と人が増え、田畑が広がり、情報と資金と物品が大河から分かれる支流の如く複雑化している男爵領の情報収集に、奔走させられているのが現状だ。

ただ、ベネス一個人としての感想で語るなら、自分を含めた影の者達の動きを全て見透かされているのではないかと疑問を抱く瞬間が時々存在する。

特に、一時期、補佐官ドランの使い魔を務めていた美貌のバンパイアで、今はクリスティーナの秘書として働いているドラミナという女性には油断ならない。

彼女には、スベリオン王子がロマル帝国を吊問した際に、王子を含む近衛の精鋭達をまとめて相手にして稽古をつけたという眉唾もの噂がある。

そして、まるで老練な政治家のようにクリスティーナを指導し、その領主としての采配と成長を見守る姿から、ベネス以外の密偵達も彼女の素性をただならぬものと疑っていた。

ベルン男爵領の上層部は、多種族国家であるアークレスト王国でも珍しいくらいに、多様な種族で構成されている。しかも、その一人ひとりが個として突出した力と非凡なる素性ないしは人脈の主というキワモノ揃いだった。

クリスティーナの近くにいるラムアの少女セリナや、黒薔薇の精ディアドラなどがその一例だ。

先日、モレス山脈に住まうラムアの集団を領内に引き入れるという出来事があり、ベネス他密偵達は、それぞれの主人に鮮度の失われないうちに情報を送ったばかりだ。

そう、送ったばかりなのだが……ベネスは屋敷の中庭から空を見上げたまま、思わず呟いていた。「御屋形様、どうやら貴方様のご息女はとんでもないお方の方ですぞ」

彼の立場からすると口にするべきでない言葉だったが、幸い、それを耳にした者はいなかった。そして、上空を見つめるベネスの視線の先では今、知恵を持ち、竜語魔法を操る本物の竜種達が何体も舞っている。

事前に知らされてはいたものの、実際に初めて「それら」を見た衝撃は途方もないものだった。しかも、「彼ら」はこれからこのベルンと正式に友好関係を結び、定期的な会合を開いていくというのだ！

ベルン村やその周辺に身を潜めていた密偵達は皆、自分達の主人に伝えなければならない情報が飛び込んできた事に、大慌てで対処しはじめていた。

ただその心情は立場によって大きく異なる。

ベネスのようにアルマディア侯爵家や、アークレスト王国に属する密偵とその主人達にとって、幸いにもベルン男爵領は敵ではない。だが、それ以外の者達にとつては脅威以外の何ものでもないからだ。

ベルン男爵領を敵に回した時、モレス山脈の竜種とエンテの森の諸種族がベルンの味方になるのなら、大国がまるまるベルンの側につくに等しい。

もし龍宮国までもがベルンについたなら、ディファラクシー聖法王国が崩壊した以上、もう地上で勝てる国家は存在しないも同然である。

それは、敵対者としては悪夢のような事実だった。

†

大地の上に立つ者達が空を占める巨大な竜達に思いを馳せている一方で、その空を舞っている竜達にも、それぞれ今日に至るまでの経緯について思うところはあった。

基本的に、竜種が他の種族と恒常的な協力・共生関係を構築するというのは、そうそうある事ではない。

ワイバーンをはじめ、一部の亜竜や劣竜と呼ばれる者達が他種族に使役されている例はある。しかし、今ベルン村の上空を舞っている知恵ある竜種達に言わせれば、それらは退化しすぎた竜種。同列に扱う事は到底出来ない。

三竜帝三龍皇や龍王、竜王ともなると、その強大な力の庇護に与るべく、他の種族が同じ棲息圈内で暮らしているが、あくまでこれは極端な例の一つだ。

モレス山脈では、水竜ウエドロが人魚のウアラの民との間に共生関係を築いているものの、他の竜達は自らの近しい家族と暮らすか、個としての生活を営んでいる。

モレス山脈が広大な事もあって、お互いの住み分けはきっちり出来ており、これまで問題なく暮

らしてきた。

その為多くの竜達が、人類社会の一部を構成する者達と接触し、正式に関係を持つ事に対して大なり小なりの疑問があったはずだ。

しかし、ベルン側からもちたされた一つの情報が、これまで通りであつてはならないという危機感と使命感を彼らに抱かせた。

暗黒の荒野を本拠地とする魔族の軍勢に、竜種の最大の敵とも言える自分達の紛いもの——『偽竜』が複数存在しているという情報である。

強大すぎる竜種達を模倣し、邪神達が生み出した偽竜は、竜種の殲滅をその存在意義としており、お互いに顔を合わせたら即座に容赦のない殺し合いが勃発する関係にある。

そんな偽竜達が軍勢の一端をなし、近く侵略者となつて襲来すると聞いてなお、傍観に徹してられる竜種はまずいない。

また、竜種の魂を持つドラゴンと、以前からガロアに入り浸り、人間との交流を重ねていた深紅竜ヴァジェの存在も、彼らが人間種との関係構築に一步を踏み出す役に立つた。

ただし、ヴァジェ以外の竜達は、ドラゴンが人間に生まれ変わった高位の竜であるという点までしか知らない。

それでも、龍宮国と関係を持たせたという実績などから、ドラゴンに対するある種の信頼と敬意は

深まっている。

もともとドラゴンからは、彼らに対して自らの素性を明らかにする予定は、今後も全くなかつた。

竜種にとつて絶対の存在である古神竜としての立場を明かしてしまえば、ウェドロ達はドラゴンからのあらゆる願いに従わざるを得なくなる。

そうなつてしまふ未来をドラゴンには誰よりも望んでおらず、彼らと築いた現在の友好関係が崩れるのを嫌っていた。

故郷であるベルン村の為ならばあらゆる手段を講じるべきと考えるのなら、このドラゴンの対応は合理的ではないだろう。

だがこれもまた、彼が古神竜ではなく人間として生きようとしているからこの判断だった。それが正しいか、間違っているか、善か、悪かの判断は人による。

もしドラゴンが古神竜としての霊格も記憶も失っていたなら、このような選択肢そのものが存在しなかつただろうが……

会合の回数を重ねるにつれて参加する竜の数は増えて、今やモレス山脈に住むほぼ全ての竜達が、ベルンとの共闘ならびに今後の協力関係の構築を認め、前向きになつていく。

これは彼らにとつての絶対者である古神竜ドラゴンが人間に友好的だった為、地上の竜種達もまた人間を相手にする時には概ね穏やかな対応を心掛けているのも一助となつた。

ドランにとっては、前世の自分の行いが思いがけず功を奏した形となったと言える。

モレス山脈住まいの竜の中でも古老格の地竜ジオルダは、重力操作によって空を飛んでベルン男爵領に向かいながら、初めてかの地の領主達と顔を合わせた時の事を回想していた。

ヴァジェの仲立ちにより、初めてベルン男爵領を訪れたあの日、ジオルダを含む八体の竜達は、眼下で自分達を待つクリスティーナ達を興味深そうに観察していた。

指定されていた降下場所で待っていたのは、クリスティーナやドラン、ドラミナ、その他ベルン男爵領の一団と、立会人を務めるドラグサキュバスのリリことリリエルティエル達。

並べられた椅子に腰掛ける彼らを見下ろしながら、風竜のウィンシャンテが最初に口を開いた。

彼はドランと面識のある風竜オキシスの甥にあたる個体で、人間に換算すれば二十代半ばほどの若者だ。

彼はオキシスの紹介で白竜に変身したドランと知り合った。ウィンシャンテ以外にも、ウエドロやヴァジェ経由で顔馴染みになった者がいる。

「これだけの同胞と約定を交わそうとは、あの人間達は肝が太いと言うべきなのでしょうかね、伯父上？」

生物として圧倒的に格下の人間相手だからと侮った響きは特になく、本気で感心している様子のウィンシャンテに、伯父であるオキシスはうむ、と一つ頷き返した。

オキシスはオキシスで、自分達を待っている者達が尋常ではない実力者ばかりと漠然と感じ取り、舌を巻いていたのだが年若い甥は伯父の様子からそこまでは察せられなかったようだ。

オキシスはウエドロと一緒にドランとよく話をしてしたが、モレス山脈に住む同胞がこれだけ集まって顔を合わせるのは稀な事態である。

「魂が竜であるドランは別として、クリスティーナという男爵や、傍らのラミア達にも、我らに怯えた様子一つないな。それに、感じ取れる力も生半可ではない。胆力ばかりではなく、普通の人類種やラミア達でないのは確かだ」

この時、クリスティーナやドラミナをはじめとしたドランと霊的な繋がりをもち、古神竜の加護を受けている面々は、他者が感じられない状態に加護を抑えていた。

これは、ドランが自粛しているのに合わせての事だ。

その為、ウィンシャンテやオキシスの評価は、古神竜云々を抜きにしたものである。

「それにしても、こういう話で一番ごねそうな深紅竜が最も積極的というのは、一体何があったのか。そのところが気になるな。なあ、ジオルダ」

この時、オキシスが話を振ったのは、この場にいる竜達の中で最高齢の地竜ジオルダだった。

退化した翼は他の竜種達に比べて小さく、四足をだらんと垂らした体勢で滞空している巨体は、さながら亀か岩の塊のようだ。

地竜には温厚な性質の者が多いが、このジオルダはとりわけ穏やかな性格をしており、モレス山脈でも顔が広く、竜種同士の横の繋がりの中心に位置している顔役である。

ヴァジェの家族が巣立つ娘に、いざとなったら彼を頼るようにと伝えた事からも、その人脈の広さが窺い知れる。

「ドラン殿に一番懐いていたのもヴァジェであるからな。かの御仁からの頼みとあれば従うであろう。ただ……いつからか、ヴァジェのドラン殿への態度が一変したな。あれ以来、随分と大人しゅうなりおったわ。そこに理由があるろうよ」

老いたジオルダからすれば、孫娘と言っても差し支えない深紅竜の態度の変化に、微笑ましいものを感じているようだ。

ジオルダが話したのは、ちょうどヴァジェがドランの魂の素性を知った時期の事だ。

その頃のヴァジェは巣立つばかりで神経を尖らせていた上に、元々気性の激しい傾向のある火竜の上位種だけあって、同胞相手でもキャンキャンと吠え立てていた。

しかしある時から突然、ドランばかりでなく他の竜達に対しても態度を軟化させており、ジオルダやオキシス達の目を丸くさせた。

「お前さんもそう見るか。単純に男女の話と結び付けて考えてよいかというと、ヴァジェの目と態度を見るに、それでもなさそうなのがまた奇妙であるよ」

首を捻るオキシスに、ジオルダが頷く。どうやらヴァジェの乙女心と恋心は、モレス山脈の同胞達にはすっかり知られてしまっているらしい。

「恋慕に勝る輝きが瞳に宿っているからな。相当に強い崇敬の念だ。ドラン殿の中身は我々が思う通りなのか、それ以上の高位の竜であったのか……。当人に語るつもりはなさそうであるから、推測しか出来ないいわな。だが、面倒だとは言うてやるな、オキシスよ。それに男女の話がまるつきりないわけでもないだろうよ。そうなると、肉体としては人間のドラン殿と、心身共に竜であるヴァジェとでは、いささか噛み合わせの悪い組み合わせになってしまうのが心配じゃ」

とはいえ、竜種と人類との婚姻というのは、長い歴史上、幾例が存在している。

ドラゴニアンや竜人と呼ばれる種族とは異なる竜の特徴を持った人間などは、このように竜種と人類の血が混ざり合って誕生した場合が多い。

歳を食った男連中がヴァジェを気に掛けるのは、彼らからしてみると娘に相当する同胞の行く末が気にかかって仕方がないからか。

「お主ら、余計な話はそこまでにせいよ」

父親気分になっている男連中に釘を刺すように声をかけたのは、濃淡のある赤い鱗や花卉のように広がる幅の広い五本の角が特徴的な火竜のファイオラだ。

ちようにオキシスと同年代の女竜で、ヴァジェと同じ年頃の娘を持つ身である。

「ヴァジェの事はヴァジェに、ドラン殿の事はドラン殿に任せよ。我らはどちらから話を持ちかけられたら、応じればよかるうに。いい歳をした男共が何を野次馬根性など出しおるか。……まったく、聞いていて気分の良い話ではなかったぞ」

ファイオラに窘められたオキシスが苦笑する。

「母親を経験した者の立場からすればそうなるか。しかし、当のヴァジェの奴が怒つたらんから、良いではないか。……いや、火炎弾の一つくらいは撃ち込んでくるかと思っただが、この様子では話そのものが耳に入つたらんな。確かに性格が丸くなったとはいえ、あれは緊張でもしておるのか？」

ヴァジェもベルンを訪問する一団に参加しているが、ジオルダ達の話に耳を傾けている様子はなく、多少緊張の面持ちで眼下のドラン達を見つめているきりだ。

古神竜ドラゴンとしてではなく、人間として振る舞っている分いくらかましとはいえ、ドランを前にしている以上、ヴァジェは緊張せざるを得ない。

その様子を、ファイオラ達は事情を知らないなりに解釈していた。

「やはり、あのドラグサキュバスなる者が気にかかるのであろう。というか、この場にいる誰があの者を無視出来る？ お主らとて気になって仕方がないので、あえてヴァジェの話題を振って誤魔化していたのではないか？」

ファイオラの指摘は実に正確であった。

この場にいる他の竜種達——雷竜クラウボルトや地竜ガントン、ウェドロらも、今回の協定の立会人として招かれたドラグサキュバスの女神の存在に、意識を引かれている。

古神竜ドラゴンの偉大なる力によってサキュバスからドラグサキュバスへと変わり、眷属となつた者達を、どうして竜種が無視出来るようか。

ゴツゴツゴツと、岩と岩がぶつかっているような笑い声を上げながら、ジオルダがファイオラをからかう言葉を口にする。

「お主は遠慮を知らぬ女性よな、ファイオラよ。お主のような激しい気性の主でも伴侶を得られたのだから、ヴァジェもその内、良き夫を得られよう」

「余計な言葉を口走りすぎだ。年老いた大岩よ。あのドラグサキュバスの件がなくとも、ベルン村の者達の話は我らを集めるのに充分であった。それでも、ドラグサキュバスの存在は無視出来ぬほどに大きな案件であるのは確かよ」

「あの様子では、どうやら地上では神としての権能を揮えぬという話は真のようだ。それでもあの者の魂に刻まれた竜の因子からは、確かにドラゴン様の気配が感じられる。ドラゴン様が転生なされたのは最近の話と耳にしたが、一体いつの間にドラグサキュバスを眷属とされたのか。お会いした時にお教えくださっていたなら、また心構えも違っていただろうに……」

「我らの都合でドラゴン様を煩わせるわけにはゆくまい。さて、そろそろ下りるとしようではな

いか。あまり空を飛んではかりいても、他の人間達に余計な不安を与えるだけで何も良い影響はない」

ファイオラの言葉をきっかけに、八体の竜達は思い思いに地上へと降下を始める。

古神竜ドラゴンの生まれ変わりが目の前にいるなどとは、夢にも思わずに。

+

寸鉄も身に帯びず、無手のクリスティナは、こちらへ向けて徐々に降下してくるヴァジェ達の姿を見つけて、小さく口角を吊り上げた。

巨大な竜種達が空を飛ぶ姿は実に壮観で、見ていて飽きなかったが、今日は話をする為にわざわざ集まってもらったのだ。

「お、ようやく下りてくるつもりになったらしいぞ」

屋敷の庭に用意された椅子に腰を下ろしたクリスティナの呟きに、左隣に腰掛けているドラミナが応じる。

「少し言葉を交わしていちゃったようですが、モレス山脈に住むあの方達にとっても、前例のない話だと、慎重になっているのかもしれませんが」

二人は今、着用者の外見を著しく醜く変化させる『アグルルアの腕輪』を着用している。

本来の彼女達の美貌は、たとえ竜種であろうとも問答無用に効果を及ぼし、種族の違いによる美醜感覚を軽く超越して魅了し、正気を失わせる危険性があるのだ。

魅了された結果、空を飛ぶことも忘れて、あれだけの質量を持った竜種達が落下してきたら、ベールン村には決して小さくない被害が発生するだろう。

「そういえば、ドラミナの故郷でも竜種は珍しい存在だったのか？」

領主としてこの場に立っているという意識から、クリスティナはドラミナに対して上司としての言葉遣いと態度を選んでいた。

これはこの場にいるドランに対しても同じだ。

そのドランはというと、こちらに視線を向けるヴァジェを見つめ返し、ふむ、と意味ありげに口癖を零している。

ヴァジェはまだドランと接する機会があると、肩に力が入って心が休まらないらしい。

「こちらの大陸よりもだいぶ珍しい存在でしたよ。バンパイアは人類の中でもかなり長命な種族ですが、故郷で知恵ある竜種の話はほとんど聞きませんでした。亜竜の類でしたなら、また話は別ですが」

「バンパイア達と余計な諍いを起こさないように避けていたのかな？」

ドラミナの話に頷くと、クリスティーナは同席している会計官のシェンナと騎士団長バルンの顔を見て微笑む。

「それにしても、皆、緊張しすぎだ。ドランとドラミナを見習ったらどうだ？ 顔色が悪いか冷や汗が凄いかのどちらかだぞ」

クリスティーナやドラミナはドランのみならず、アレキサンダーやバハムートなど、他の始原の七竜とも顔を合わせている為、今更何体の竜種を前にしても驚きはなかった。

しかし、常人であるシェンナ達からすれば、一生のうちに一度でも遭遇するかどうかの竜種相手に緊張を隠せていない。

少しでもその緊張を解そうと、クリスティーナとドラミナが小話などしたわけだが、どうやらあまり成果は出なかったらしい。

「男爵様、その、緊張するなど言われましても、これでも精一杯努力はしているのです」

眼鏡の奥の瞳をあちこちにさまよわせながら、シェンナはなんとか震える声を絞り出した。

ベルン男爵領の財布の紐を握る者として辣腕を振るい、その能力を存分に發揮している才女も、人間など一口で丸呑みにする巨大な存在の前に、身体の震えを抑えられずにいる。

バルンなどはまだ歯を食いしばって堪えてはいるが、文官である彼女に武官と同じ胆力を求めるのは酷すぎるだろう。

「いや、私も無茶な注文だとは思うよ。話は私とドラミナ、ドランに任せておいて、皆は気絶しないようになんとか堪えてくれれば格好は付くからな。まあ、後は興奮しすぎた竜教団の方達が乱入してくるような事態が起きなければ、特に支障なく話を終えられるだろうさ」

僅かな気負いもなく笑顔で語るクリスティーナの姿を、シェンナ達はこの時ほど頼もしく思った事はない。

複数の竜種達を前にして、今のクリスティーナのように全く怯まずにいられる者が、世界にどれだけいるだろうと、シェンナ達は感激さえしていた。

そしてついに巨大な竜種達が音もなく大地へと降り立った。

それに合わせてベルン側の全員が起立し、お互いに視線を交える。

随分と高低差のある視線の交錯は、とりあえずは平穩に始まった。

竜の側に侮蔑や傲慢といった感情は希薄で、人間側の出席者にも一部を除いて恐怖や不安の色はない。

屋敷の外では竜教団の教徒や聖職者、野次馬達が様子を窺っていたが、いざ伝説の存在を目の当たりにすると、圧倒的な威圧感と巨体を前にぱたりと声が絶えている。

会談を見られる事自体は構わないが、内容を聞かれるのは好ましくないという判断により、この場には遮音効果のある結界が張られている。しかし少なくとも周囲のざわめきは、結界を張らなく



でも勝手に消えてくれたようだ。

クリスティーナは眼前に並び立つ竜種達の姿を惚れ惚れと見回し、ドランの姿に体を半分ほど強張らせているヴァジェの姿を認めて、頬を緩める。

ある意味、この中で一番面倒な立ち位置にいるのがヴァジェだった。

ドランをドラゴンと知りながら同胞達にはそれを伝えられず、あくまでも友好関係を求めてきた人間として接しなければならず、その匙加減について常に頭を悩ませている。

本来、彼女はあまり頭の回転がよろしくないというのに。

「オキシス殿、ウインシャンテ殿、クラウボルト殿、ガントン殿、ジオルダ殿、ウエドロ殿、ファイオラ殿、ヴァジェ殿。本日は我々の呼び掛けに応じ、こうして足を運んでくださった事に、まずは感謝を。私がアークレスト王国からベルンの地を預けられた、クリスティーナ・アルマディア・ベルンだ。永らく交わる事のなかった竜種のあなた方と、これからは良き縁を結べるようにと、心から願っている」

舞台上の名女優のように大きく声を張り、堂々と言葉を連ねるクリスティーナに、竜達は少し感心したように目をパチクリとさせた。

自分達を相手に一片の恐怖を抱かずに、心の底から本気で来訪を歓迎していると分かったからである。

彼らにしてみても、ここまで度胸のある相手だとは思っていなかったのだろう。

補佐官であるドランや秘書のドラミナは、あくまでこの会談のベルン側の主役はクリスティーナであるとして、求められない限りは口を閉ざしている。

最初に竜側の年長者であるジオルダがクリスティーナに言葉を返した。明確な上下関係のない竜側で強いて代表者を選ぶとなれば、この老竜となる。

「なに、我らとて、言葉を交わす価値があると思えばこそ、こうして足を運んだのだ。貴殿の言う通りの良き縁を結べるかどうか、全てはこれから次第であるから、貴殿らと友好的な関係を結ぶかどうかは、まだまだ保障しかねるというものだ」

「交わりを持たぬと断じられるわけではないのでしょうか？　ならば、後は我々の努力次第なのですから、それだけで私達にとっては充分です。それと、事前にお伝えしました故、ご存じとは思いますが、こちらは今回の会談における立会人であるドラグサキュバスの女神リリエルティエル殿です」

これまで沈黙を守っていたリリエルティエルが、クリスティーナの紹介に合わせてしずしずと歩み出る。

クリスティーナ達と竜達の間地点で足を止めた彼女は、たおやかな仕草で竜達に向けて深く腰を折る。

「ただ今クリスティーナ様よりご紹介に与りました、リリエルティエルです。この度は私と同胞達が古神竜ドラゴン様の眷属である事から、竜の方々とも関係があると、特別に立会人を依頼され、この場にあります。古神竜ドラゴン様の眷属として、この度の会談の始まりから終わりまでを見届けさせていただきます。どうか私の事は気になさらず、お互いに忌憚のない意見を交わし、飾らぬ相互理解を深められる事を願います」

条件さえ整えば三竜帝三龍皇すら上回る力を発揮出来るドラグサキュバスの女神に、竜達の視線が殺到する。

彼女から敵意が砂粒一つも感じないのを確かめて、竜達はようやく視線を引き剥がしたが、ドランの真実を知るヴァジェだけは比較的リリエルティエルへの警戒心は薄かった。

もともと、女としては、ドラゴンの気配を纏う“サキュバス”という存在に苛立つている様子だ。そんなヴァジェの内心を見透かして、クリスティーナやドラミナなどは微笑していた。

これは、既にドランと恋人である彼女達の余裕の表れとも言えよう。

「貴殿らの使者から聞かされてはいたが、これは確かにドラゴン様の気配。あの方が選ばれたというなら、立会人にこれ以上相応しい方はおるまい。強いて難点を挙げれば、立会“人”と言うのはいささか語弊がある事くらいか。よもや女神がその役を担うとはな」

「そのように認めて頂けるなら、私もドラゴン様に胸を張って立会人としての役目を果たせるとい

うもの。私はあくまで公正中立の立場として、どちらかに肩入れする真似はしませんが、私情を申せば、ベルンとモレス山脈の竜達の間には良縁が結ばれる未来を願います」

リリエルティエルは自分が口を出すのはひとまずここまでだ、と暗に態度で示し、クリスティーナと竜達に頷いた。

ここから先は人間と竜の話し合いの時間だ。

「ではベルン男爵、改めて名乗らせていただくのかの。わしは地竜ジオルダ。モレス山脈で眠りかけてばかりいる老体じゃが、その分顔は広いので、纏め役のような真似をしている」

竜達を代表するジオルダに続き、クラウボルトやウィンシャンテ達も名乗りを挙げていく。

彼らからすればただ普通に喋^{しゃべ}っているだけなのだが、その巨体に見合う声量の大きさに、クリスティーナ達が少しだけ耳を塞ぎたい衝動に駆られていたのは、内緒の話だ。

ジオルダを皮切りにこの場にいる全員の自己紹介が済んでから、クリスティーナがこの会談の目的を口にする。

「私達があなた方に協力関係、あるいは同盟関係の締結を持ちかけたのは、今後、モレス山脈に我がベルンの人間が多く足を踏み入れる機会が増えるのを見越しての事です。その際に不幸な行き違いが生じないように、予め正式に関係を結んでおくのを目的としています。そして、私は竜であるあなた方とも友好的な関係を築きたいと願っています。竜と人類とでは生物としてあまりにかけ

離れてはいますが、こうして近くに暮らしているのですから。お互いに協力出来る点を見つけ出し、交流を重ねる事は、良い未来へ繋がると信じています」

これは嘘偽りのないクリスティーナの心情だった。

以前の古神竜ドラゴン殺しの罪に苛^こまれていた時期の彼女ならば、とてもではないがこのような提案は考えられなかったが、今となつてはこうした言葉も臆^{おそ}せず口に出来る。

また領主の立場から見ても、モレス山脈の竜達と関係を結ぶのには相応の利益があつた。

まず、単純に竜達の強大な戦闘能力を背景とする軍事力の強化。

そしてモレス山脈に長く住まう彼らはかの地に眠る資源について熟知しており、今後山脈の開発を行う事になれば、彼らほど頼りになる案内役と護衛役はいない。

それにいずれはモレス山脈のみならず、山脈を越えたその先に進出する日も来るだろう。

そうした時にも、自在に空を飛び、竜語魔法を用いれば一度に大量の物資の輸送も出来て、かつ極めて高い自衛能力を持つ竜達は頼りになる。

「そちらの意図は承知している」

血のように赤いクリスティーナの瞳を見つめ返しながら口を開いたのは、雷竜クラウボルト。人間で言えばクリスティーナと同年代、二十歳になるかどうかの若い世代だ。

一日の多くを雲海の中で過ごし、高高度に棲息する大型飛行生物や雲などを食べて生きている雷

竜だ。

その声は落ち着き払った青年のもので、苛立ちなどは含まれていない。

「これまで通りの暮らしをしていくのなら、おれ達と貴女達^{あなたたち}との交流など不要なものだとは思えない。だが、時折空の上から眺^{なが}めていたこの村の著しい変貌^{へんぼう}を考えれば、貴女達がこれまでとは異なる暮らしを送り、おれ達のような異種との交流を考えはじめたのも当然と頷^{うなづ}ける。ましてや、竜の住処に足を伸ばすつもりがあるのなら、事前に話を通しておこうと考えるのは賢明な話だ。貴女の先見の明と聡明^{そうめい}さには敬意を抱く」

意外にも理知的な印象を受けるクラウボルトの言葉に、クリスティーナ達は沈黙を選び、続きを待つ。

若き雷竜は、時折、考える素振^{そぶ}りを見せながら言葉を紡ぎ出してゆく。

社会的地位のある人間と話す機会など、これまでのクラウボルトの「竜生」にはなかったので、彼なりに慎重に、努力して言葉を選んでいるのだ。

「おれ達は今の暮らしで何も不足を感じてはいないが、時折、深紅竜が機嫌の良い様子で貴女達の街に通う姿は見ていた。不足はなくとも新たな満足や充足を得られる機会はあると思う」

それを聞いてヴァジェの顔が面白い具合に歪^{ゆが}んだが、口元をニヤつかせる者こそいても、指摘する怖いもの知らずはいなかった。

彼女ならばこの場であっても怒りのままに噴火しかねないという認識は、クリスティーナ達ばかりだけではなく、モレス山脈側の竜種にもあるらしい。

「ええ、単に物質的に豊かになるだけでなく、私達の持つ食事や音楽、演劇、文学、哲学、陶芸などをはじめとした文化を堪能していただければと思います」

「おれ達も歌を作ったり、料理をしたりはするからな。特に人間種の文化は多様性に富んでいる。おれ達にとっても良い刺激になるだろう。だが、それは平穏な時間での話だ。貴女達の呼び掛けに對しておれ達が応じた理由が別にある事は、改めて言うまでもないだろう？ 残念だけれどもな。ベルン男爵よ、急^せかすようで悪いが、おれは「それ」を確かめたいのだ」

無論クリスティーナとて、その話を語らずに終わらせるつもりはなかった。

彼女が視線を向けると、ドランはすぐさま席を立ち、事前に用意していた映像を投射する箱型の魔法具を竜達の前に置いた。

箱の一つの面に握^{にぎ}り拳^{こぶし}ほどのレンズが埋め込まれており、内部に封入した光精石^{こうせいせき}に記録した光学映像を増幅して空間に投射する品である。

ドランはヴァジェが終始自分に意識を向け続けているのに苦笑しそうになるのを堪えながら、レンズの横から突き出している小さな棒を倒した。

内蔵された魔晶石^{ましゅうせき}が反応して微量の魔力を発生させ、それが光精石に流れ込むと、映像が再生

される。

映し出された映像に合わせて、ドラムが説明を始める。

「こちらが、我々の捕捉した暗黒の荒野の軍勢に参加している偽竜達の映像です」

空中に投影されたのは、始祖竜より誕生した竜種達の不倶戴天の敵にして模倣者、偽造品、贋作たる偽竜の群れなす姿であった。

何体もの偽竜達が赤茶けた大地の上で整然と並んでいる。

竜種以外の生物であれば戦いを挑む事すら放棄して逃げ出す最強の種族達——の紛い者たる、偽りの竜達。

一口に偽竜と言っても、その姿は多種多様だ。

一見すれば正統なる竜種と区別がつかない姿の者。

空を飛ぶのに到底役に立たないような小さな翼を無数に伸ばし、紫色の瘤の合間から肉の触手を生やしている者。

百足の如く長大な体から無数の足が伸び、顔面の半分を埋め尽くす複眼の昆虫めいた姿の者。

火を操る者、水を操る者、風を操る者、土を操る者。

雷を、光を、闇を、音を、氷を、病を、毒を、熱を——様々な属性を帯びた、創造主の異なる無数の偽竜の末裔達が、一つの集団として成立していた。

異種族はおろか、同族同士でさえ殺し合うのが珍しくない偽竜達は、地上の竜と同様に群れをなし、集団として行動する事自体が稀な存在だ。

創造主や創造主を同じくする上位の悪魔や亜神の下で軍勢に組み込まれる例はあっても、よもや地上において偽竜達が秩序立った軍勢として成立する例は滅多にない。

これを成したのが邪神の系譜に連なる者であるのならば、地上の生命にとって恐るべき上位存在が降臨した事を意味する。

あるいは地上の北方の魔族達が偽竜達を統制しているのならば、それは偽竜すら支配するとしてつもない王者の誕生を意味する。

どちらにせよ、いずれは偽竜を含む暗黒の荒野の軍勢と激突するベルン男爵領ならびにアーケレスト王国にとっては、厄介という言葉では収まりきらない凶兆の体現だ。

映像の中の偽竜達は、自分達の前に立つ二人組の言葉に静かに耳を傾けているようだった。

その内一人は、青黒い肌に銀の髪、そして頭の左右から延びる湾曲した角、黒く染まった目の中に黄金の瞳を輝かせた端整な顔立ちの女。

もう一人は黄色い毛並みに覆われた獣の下半身と、背中から三本目の腕を生やした、赤毛の幼い顔立ちの少年だった。

一世代ごとに特異な容貌を持つのが珍しくない魔族の男女だ。

この映像を見ているドランが人間に生まれ変わってから初めて見る、この時代、この惑星の魔族——おそらく、魔界から地上に移り住んだ一派の子孫だろう。

神としての権能や神格はほとんどあるまいが、それでもバンパイアやドラゴニアンと同等かそれ以上の力を持ち、人型の生物として最強の一角を担うのは間違いない。

立ち居振る舞いからして、この男女が偽竜達の上司のようだ。

青黒い髪の女が身ぶり手ぶりを交えて何かを伝え、それを聞き届けた偽竜達が各々天高く舞い上がり、まもなくそれぞれ小さな集団に分かれて散った。

雲よりも高い位置に達した偽竜達は、彼方の地上に設置された目標物に向けて、上空から偽・竜語魔法や暗黒魔法、ブレスを放ち、爆撃していく。

魔族達もそれを追って空中に浮かび上がり、偽竜達を監督している。

これ以外にも偽竜達が無数の兵を空輸し、特定の目標に対して降下して、迅速に仮想敵陣内に戦力を送り込む演習の映像などが続いた。

暗黒の荒野の軍勢は、既に偽竜を戦略と戦術に組み込み、実用訓練を行う段階に達しているのだ。映像で確認出来た偽竜の数は五十体を超え、その眷属達も含めればさらに桁が一つ二つと増えるのは想像に難くない。

アークレスト王国のみならず、轟国やロマル帝国といった大国の上層部も、この映像を見せられ

れば戦慄するだろう。

ベルンにしてもモレス山脈に住まう真にして正統なる竜種達とその眷属が味方とはいえ、双方の竜同士の戦力差は決して樂觀視出来るものではない。

ドランが偵察用ゴーレムを介して得た情報を見せられて、ヴァジェに至るまで竜種達が例外なく牙を軋ませ、全身から陽炎の如き闘志を立ち昇らせる。

しかし、これらの映像は数日前のものであり、今現在の暗黒の荒野の映像ではない。それに、遠からず偽竜達とは牙を交える時がやってくる。

紛い物共へ向けた敵意と闘志を爆発させるのはその時でよい。

竜達はどうにか画像から視線を引き剥がす。

クラウボルトが難儀しながら闘志と怒りを呑み込んで、クリスティーナに礼の言葉を口にする。

「ああ、なるほど、これはおれ達も戦わねばならんな。おれ達だからこそ戦わなければならん。ベルン男爵、あなた方ベルンから協力の申し出がなかったとしても、おれ達はおれ達で偽竜共らに戦いを挑んだだろう。それが始祖竜から生まれた竜種というものだ」

予めこのような反応をするだろうとドランから聞かされていたとはいえ、クリスティーナは、偽竜の姿を映像越しに見た途端に闘志を膨れ上がらせたクラウボルト達の姿に驚いていた。

同時に、偽竜達との戦いが終わるまでは、殺気立った竜種達の相手は自分かドランでないと無理

だな、と結論を下したのだった。

何しろ、シェンナや他の文官組の顔色が青一色に染まりつつある。

ドランが竜種達の放出する闘志をさりげなく和らげていなかったら、この場で気絶していたに違いない。

「我々からしても、強大な偽竜達の集団と戦わなければならぬ事を考えれば、真なる竜種であるあなた方の助力を得られるかどうかは、文字通りの死活問題です。偽竜の存在を証明出来れば、きつと協力を得られるとは思っていました。ただ、実際にそうなるかどうかは一種の賭けでした。見る限り結果は吉と出たようで何よりです。ただ、一つだけ言わせていただけるのでしたなら、あなた方との友好は偽竜の脅威などではなく、もっと穏便な形で結びたかったと思っています」

口惜しそうなクリスティナの表情を見て、クラウボルトが僅かに目を細める。

「この状況で心の底からそんな言葉を口にするのだから、貴女は本当に暗黒の荒野の者共との戦争以外でも、我々と友好的な交流を持つようとしているのだな」

「もちろんです。今回の戦争の件は、暗黒の荒野の者共が余計な真似をしでかしてくれたと、心底から忌々しく思っているのですから。魔族とはいえ、地上で暮らしているのならば、必ずしも敵対する必要はありません。場合によっては彼らとも手を携える事も視野に入れていました。しかし――」

魔族との共存も視野に入れていたというクリスティナの発言には、ヴァジェを除く竜種達も驚かされた。

魔界側の神々の子孫ないしは眷属である魔族と、地上の人類達は基本的に相容れないものだ。

神の仲介などを経て、地上の魔族が他の人類等と節度を持つて共存する例はあるが、この惑星においては極めて稀、あるいは前例のない話である。

まだ若く柔軟な思考の持ち主であろうとも、クリスティナのように直接的にこのような言葉を口にするとは信じがたい。

「暗黒の荒野を統一した者は、荒野のみならずこの大陸の支配を、ひいては他の大陸全てを含めた世界の征服を望んでいます。この場合、魔族であるからではなく、武力による世界制覇を狙う相手であるから、戦わなければならないのですよ」

「敵首魁の思想まで把握済みか。よければおれ達にも今分かっている限り――いや、話せる範囲で構わないから、情報を共有してもらえるとありがたい」

「もちろん、お伝えする予定でした。既に我らの主君であるアークレスト王家にも伝えてある情報ですが、暗黒の荒野を統一したのは魔界に墮ちた軍神サグラバースを祖とする魔族の一派と思われます。そして、暗黒の荒野に棲息していた多種族を支配下に収め、一つの勢力として統合したのは、魔王を僭称するヤーハームという男です。彼を筆頭に、強力な魔族と各種族の精鋭達を幹部に据え、

まずはこの大陸全土の制圧を狙って、いよいよ動き出たわけですね」

竜達は皆、クリスティーナが語る情報に真剣に耳を傾ける。

「当面、彼らは暗黒の荒野の西にある大国との戦争を主眼に置いているようですが、私達へもその手を伸ばすのは遠い未来の話ではありません。彼ら暗黒の荒野の者達は、彼らの古い言葉で『灰色の世界』を意味するムンドウス・カーヌスを名乗り、建国しました。よって私達は、暗黒の荒野に発生した敵性勢力をムンドウス・カーヌスあるいはその頂点に立つ者が魔王を名乗る事から、魔王軍と呼称しています」

「灰色の世界、か。暗黒の世界たる魔界より光と闇の混在する地上へ移住したが故の名付けであるかな？ それよりは魔王軍の方が端的で呼びやすいな。今更かもしれないが、このおれ、雷竜クラウドボルトは、魔王軍との戦いにおいて全面的にベルン男爵に協力する事を約束しよう。貴女の言葉には信を置けると感じられたし、あの映像を見る限りでは、ただ偽竜共とだけ戦えば済むという話でもあるまい。ならばこちらにも相応に協力者を求めるべきだとおれは思う。他の皆はどう考える？」

答えは分かり切っているが、クラウドボルトがあえて問いかける事には大きな意味があった。

この場が集った竜達には横の繋がりや年長者への敬意こそあれ、明確な上下関係が存在するわけではない。

誰かが協力を申し出たとしても、それはその誰かだけの意思表示であり、この場が集った八体の

竜全員の意思表示とはならないのだ。

当然、クラウドボルトの意図を悟れぬ竜はこの場にはおらず、ファイオラやガントンなどは「小僧っ子が」と、聡い若造の気遣いに苦笑しながら承諾の言葉を口にした。

「地竜ガントンの名において、アーケレスト王国ベルン男爵クリスティーナ殿よりの申し出を受諾する。忌まわしき偽りの竜と、それらと共に戦禍を広げる魔の眷属を討ち滅ぼす力となるう」

「始祖竜の末裔の一席に名を連ねる者として、火竜ファイオラもまた、ベルンと名付けられた地に住む者達に助力しよう。我が赤き火炎は我らの敵を灰へと変えるだろう」

二竜がそれぞれの名において重い誓約を口にした。

これを皮切りに、残るウエドロやウィンシャント達も次々に自らの名前や祖となる竜達の名を告げて、正式にベルン男爵領との協力を確約していく。

そして最後に残されたのは深紅竜ヴァジェ。

ドラン達が学生だった頃からの知り合いであり、この中で最も協力的であろう、美しくも苛烈な少女だ。

彼女は「際厳肅な面持ちでクリスティーナとドラン達を見下ろしながら、言葉を紡ぎ出す。

「偉大なる始祖竜、そして始原の七竜より分かれた真なる竜種として、深紅竜ヴァジェは全身霊をもつて偽りの竜達と戦い、ベルンの地に住まう者達に寄り添う事を誓う」